The Iris Murdoch Newsletter of Japan

No. 2 December, 2000

アイリス・マードックとマーガレット・ドラブル

井　内　雄四郎

今から21年前、一年半ほどロンドンに滞在した時のこと、かねてからその作品を訳したり、紹介文を書いたりしたアイリス・マードックとマーガレット・ドラブルに会うことができた。まだ1ポンド、600円の時代である。この会見については既に一、二の所で記したが、ある意味では彼女たちは現代イギリス文学を代表する対照的な作家である。せっかくの機会だから、そのときの印象を元に、この二人の作家のささやかな素描を試みてみたい。

1980年6月23日(月)の夜、ロンドン南西部ダリッジにある拙宅の電話が鳴った。受話器を取ると、「ハロー、ユーシロー、ジス・イズ・アイリス」という声がする。実に親しみのある気さくな話し方だが、あいにくアイリスという名の知人、友人はいない。はて誰だろうと考えているうちに、突然アイリス・マードックからの電話だと気がついて、狼狽した。数ヶ月前、あなたと俳句や禅の関係についてぜひ詳しく伺いたいと会見を申し込んでおいたのだ。待ち合わせは翌日午後2時、場所はスローン・スクエアの「キングズ・アームズ」。あとで聞くと、ここはマードックお気に入りの所で、よく待ち合わせに利用していたらしい。

当日は小雨の降る肌寒い天気だったが、注文したジュースが運ばれてくると、マードックは月並みな会話は一切抜きにして、いきなり1969年の第一回の訪日の印象や宮島の鳥居の素晴らしさを滔々と語りはじめ、その真摯な熱っぽい姿勢で私を驚かせた。やがて俳句や禅の話題に移り、彼女は自分が最初に俳句を知ったのはR. H. ブライスの大著『俳句』によってであり、学生時代、鈴木大拙の著作に接し深く感動したことなどを率直に、憑かれたように語った。またアーサー・ウェイリー訳『源氏物語』で知った日本の宮廷文学の素晴らしさを賞賛し、翻訳者たる者はすべからくウェイリーのようであらねばならないと強調した。

彼女は俳句や禅の寡黙な表現の背後にある無限の拡がりの持つ魅力を指摘した。では、どの句が最も印象的かと尋ねると、彼女は「フルイケヤカワズ　トビコム…」とそこまでを日本語で答え、「あとは覚えられません」と童女のようににっこりした。

次に会話は彼女の戯曲『三本の矢』に移った。この中で和歌ではなく俳句が登場しているのは、長い豊かな措辞を特色とする欧米の詩にとって、和歌の長さは中途半端であり、簡素で寡黙な俳句はかえって欧米の読者に新鮮な文化的衝撃をあたえると考えたからではないかと尋ねると、マードックは大きくほほえんで、それはあなたの買いかぶりで、自分はかねてから『源氏物語』にならって日本の宮廷を舞台にした作品を書きたかった。俳句を使ったのは、宮廷では和歌を詠むことはむろん承知していたが、和歌についてはあまり知識がなく、ブライスを通じて知った俳句を使ってみたのだということだった。

もう約束の時間である。私が礼を述べて立ちあ

がろうとすると、マードックは突然あなたは俳句を作りますかと問いかけてきた。私がええと答え、照れながら自作の「イギリスはクイーンに犬に薔薇の国」ほか三句の英訳を差し出すと、マードックはじっと眺めたあと、「イギリスは…」の句はとてもおもしろい。イギリスは本当にクイーンに犬に薔薇の国ですねえと声を挙げて笑い、ハンドバッグに紙切れをしまった。

このようにマードックとの一時間は、本当に知的な緊張とスリルにみちた心温まる時間だった。私は東洋の文化とあれほど真剣に熱っぽく向き合う欧米人に出会ったことがない。後日彼女から「1939年のアガメムノーンのクラス」(1977) という詩のコピーが送られて来たことを付け加えておこう。

ドラブルに会ったのは、その前年の5月である。自宅の応接間ににこやかに現れた彼女はケーキと紅茶を勧めながら、私に家族のことを尋ね、家族とロンドンにいると知ると、奥さんはこちらの生活を楽しんでいるかとか子供さんの学校で困ることはないかとか、こまやかな気配りを示し、自分の子供達のことを優しい母親のまなざしで楽しげに語った。続いて彼女は自作の主題や意図、登場人物、尊敬する作家などについての私の質問にてきぱきと明快に、絶えずユーモアをもって次々に答えていった。何と社交性にとみ、頭の回転の早い、バランスのよく取れた人かと感じ入ったものだ。

やがていとまを告げようとすると、彼女はバス停まで送ってくれた。数日後自宅のパーティーに私達夫婦を招待する旨の手紙が届き、私が贈った風呂敷をネッカチーフにして皆に賞められたとあって、私をにやりとさせた。

REMEMBERING IRIS

Christopher Heywood

My first meeting with Iris was in John's room in St Anthony's College, Oxford, at a small party to celebrate their engagement to marry. Few people were present: John's mother, David and Rachel Cecil, and a scattering of others. The spirit of the frolicsome post-war decade prevailed. The Cold War had not yet bitten to the bone, Wall had not appeared, Hungary and Belfast had not happened yet. Bright breezes seemed to promise another perpetual Edwardian summer.

John, as I recall the event, offered cups of tea and plates of cake, and it is hard to imagine that wine was absent. My recollection is that his mother tactfully let him do all the work. Perhaps she recognised the emerging chef who was destined to lend a new value to the concept of spam. She spoke to me kindly, as though we had known each other for a long time, of things I have forgotten, perhaps about novels, as that was the subject of my postgraduate research at that time. It was a relief not to have to talk about South Africa, a subject I regarded then as a lead balloon, or the war, which by then had faded into the comfortable distance, if such a thing can be imagined, of some seven years before. I exchanged a word or two with Iris, I forget about what :for us this was a rather formal first meeting. John was too busy for conversation. The others were strangers. For the rest of that brief afternoon I had one of those conversations with Rachel Cecil which one never forgets, about the Bloomsbury world. Happily this was not a subject of research. A first post-war book, investing a new subject called Bloomsbury, had recently appeared, and I had read a review. Literary life seemed

about to begin.

Nearly forty years later we met again. Amazingly, they remembered the post card of Jan Arnolfini and his wife which I had sent them to congratulate them on the wedding. It was posted from Birmingham, where I had my first academic job. I regret that card now, as it portrays a regnant lady, and that didn't happen. Academic life cuts one off mercilessly from dear friends, yet it sharpens memory. Perhaps it increases affection, though the novels and poems about it seem to say the opposite. Although she was inseparable from John for nearly half a century, they had lives of their own, as the memoirs have shown. In the pre-engagement years I knew him as a nimble and unstoppable literary mind, and that rare phenomenon, a tutor who was a friend from the start.

Before the engagement party I recognised Iris as a celebrity in the world of Ideas, and that meant Isaiah Berlin to New College people like myself, though we were sagely aware that other names and other faces, and even books, did exist in the great world of Philosophy outside the College walls. In those days I first saw her in front of the Ashmolean, with fruit and veg. in the string bag which everyone used in those days. She was immersed in thought, I imagined, about Aristotle and Wittgenstein, but more probably she was rehearsing phrases for the gestures she made her own in the novls: the 'gamine' look, the hand-made hair-do, the stumping way of walking, the piercing blue eyes darting yet amazingly restful to the point of glassiness. In those days it was rumoured that everyone was completely crazy about her. What else could one be? Everyone was. Her novels celebrate the wild centre of existence. Later, in the remote fastnesses of Sheffield, when I became the owner of a green Riley 1.5(it was a joy that ceaselessly broke down) its colour was instantly recognised by a passing Oxford scientist, not as the correct British Racing Green but as 'Murdoch Green'.

The 1990s were memorable for the meetings at my small house in Oxford. My kind tenants were in France during the summers when I had study leave from Okayama, so I had the house to myself and the visitors. Naturally there had to be summer parties, as everyone in Oxford has to have a summer party to while away its long Edwardian summers. To my joy 'the Bayleys' came along and Professor Yozo Muroya, my ever entertaining colleague at Okayama, continued his conversations of long standing with Iris, about her novels, and Ideas, and Buddhism, and War and Peace. That's a guess, as, to be fair, I never did find out what the conversations were about.

My own conversations with Iris in those last years were lively but uneasy. Not being Irish, I tread carefully on the subject which suddenly emerged, in *The Red and the Green*, as close to her heart. Her solutions were a trifle over-clarified, I thought, after a conversation in which she laid the blame for dissension in Ireland at the door of Pope. Nor could I enthuse about her having adopted, a shade under-critically I thougt, the fashionable idea that Heathcliff, the hero of *Wuthering Heights*, was the son of old Mr Earnshaw. How could he be? It wouldn't work. Suddenly those bright summers faded as the end approached. Her repeated phrase at our last conversation was:'Where?…' and again 'Where…'. Even so, there is a philosophical truth in that question. Do we ever know just where we are?

Her early novels were a beacon in the 1950s, among new work by Kingsley Amis, that supple stylist, and Angus Wilson, presiding spirit of the old Reading Room in the British Museum. One day I will take up the later novels, to share Iris's experience of the violent world we lived through. Re-reading the care-free early novels will be a future pleasure. Remembering her is an amazing joy.

第 2 回 大 会 報 告 記

小 野 順 子

平成12年10月7日(土)、「第2回日本アイリス・マードック学会」が、川崎医療福祉大学で開催されました。関東から九州にいたる各地から28名の方が参加されました。司会の福永先生は前日、鳥取県西部地震の余波を受けて地震とは無縁だと考えられていた岡山も震度5の激震にみまわれたこと、それにもかかわらず学会が無事に開かれてよかったと述べられました。続いて室谷会長もユーモアたっぷりに地震にふれられ参加者に謝意を述べ実りある第2回学会になるよう願いますという挨拶をされました。理事会、事務局、会計から報告があり、総会は終わりました。午後からは4つの研究発表と特別講演が行われました。古田島さんと笹岡さんは共に、*The Sea, the Sea*を選ばれました。古田島さんは、*The Sea, the Sea*におけるマードックとヴェイユの思想的類似性について、笹岡さんは、主人公チャールズの魂の遍歴をプラトンの「洞窟」の比喩の観点からそれぞれ言及されました。山本先生は、『ユニコーン』のなかの呪われた部分、暴力性をとりあげた研究を発表されました。榎本先生は*The Green Knight*をとりあげ、ストーリの面白さ、存在感のある複数の人物、そして神話とリアリティが調和したこの作品はマードックの晩年の最高傑作であると熱をこめて話されました。詩人のPaul Hullah先生の特別講演はマードックの詩についてでした。彼女は作家、哲学者として世に知られているが又詩人としても非凡な才能を持つ人であることを数編の詩を取り上げて話されました。発表者、講演者は共にその作品の魅力を語り、その作品の真髄を読み解こうとされていました。それ故に研究発表、特別講演ともに説得力があり素晴らしいものでした。閉会の辞は井内先生で来年の再会を誓って閉会となりました。

懇親会は同大学の食堂で開かれました。駒沢さんの司会のもとで楽しい懇親会になりました。乾杯の音頭をとってくださったのは清野茂博氏でした。氏は奥様の婦美子さんが会員なので彼女の秘書役に徹するつもりであったのに乾杯の音頭をとることになったので急遽会員になったとジョークを交えてお話になられました。お料理はおいしく、適量のアルコールもあって宴が盛りあがるなか、マードックの作品と出会うことになったきっかけを出席者みんなが順番に話しました。旧知の人も新しい会員もみんなマードックと彼女の作品を愛し研究する人達なので、話がはずみ時間は本当にあっというまに過ぎ去ってしまいました。第1回大会も暖かい心のこもる会でしたが、この第2回大会はそれにもまして心に残る会となりました。会場の外にでると、秋風が吹き、おぼろ月が出ていました。参加者は来年のこの時期にこの地で再会することを心に抱き、名残を惜しみつつ別れました。

研究発表要旨

The Sea, the Sea におけるマードックと S. ヴェイユの思想的類似とその小説的展開

古田島　綾　子

マードックとフランスの思想家、S. ヴェイユ（1909－43）との思想的な繋がりは広く知られるところであるが、プラトン思想を原点に持つ両者の基本的な世界観、人間観は、極めて多くの点で一致する。まず両者はこの世界における善の不在から出発する。世界は盲目的で非情な必然の力のみに支配されており、我々人間は物理的にこの法則に従うだけでなく、精神的にも重力に近いメカニズムに支配される存在である。精神が有するメカニズムとは、自我を拡張し、世界をそれで埋め尽くそうとする働きであり、この自我の産み出す幻想こそが、我々を束縛するのである。

*The Sea, the Sea*においては、こうした両者の基本的な世界観が如実に表れている。舞台となる荒々しい海は、世界を支配する必然性の象徴であり、その海を背景に古い館に住む主人公、チャールズは、必然性の支配に晒されながらも、幻想という館を構えてそこに閉じこもる人間の姿を表している。彼は自分こそが人生の支配者であると信じる典型的な人間であるが、この自我の幻想を捨てない限り、我々にとっての救いもありえない。世界を支配する必然性の存在を受け入れ、自分が執着する虚しい自我を取り除いて初めて、我々は真実に近づくことが出来るのだ。ヴェイユは、人間の中にそれを可能にする聖なる部分が存在すると言う。それは我々の中にあって、いかなる状況においても善を求める非人格的な部分である。

普段は自我で覆い隠されているその部分が剥き出しにされる契機となるのが、美と不幸の存在である。美によって、非情な必然性の支配する世界も愛すべきものとなっており、美を愛することによって、我々は必然性の支配に同意する。しかし、美は最も親しみやすい契機である反面、はかなく消え去りやすいものでもある。小説中のチャールズの美に対する最初の開眼も、彼に決定的な解放をもたらすには至らない。これに対し、不幸は人間の身体と魂に必然性の荒々しさを叩き込んで人格を剥ぎ取る教化的な役割を果たす。ヴェイユによると、真の不幸は社会的な失墜、肉体的苦痛、そして精神的な苦悩から成るが、チャールズはこの三つの要素全てを、演劇界からの忘却、海への転落、そして青年タイタスの死という形でそれぞれ経験する。不幸という不条理を前に、彼の幻想の世界は崩れ去るが、そこで初めて、不幸に屈しない唯一の部分、人格を超えた聖なる部分が剥き出しにされ、彼は不幸の沈黙の答え―必然性の支配の下に万物が何の疑問も持たずに服従する世界の姿―に行き着くことになる。

必然性の絶対的な支配を認識し、自我の幻想の虚しさを知ってなお、チャールズには再びこの世界で生きる喜びを取り戻すという最後の仕事が残っている。それはマードックが最終的に目指す、必然性の支配への愛をともなった同意によってのみ果たされる。ここで再びチャールズと世界の掛け橋となるのは、世界の美である。彼は一連の事件の後、宇宙との一体感を再び経験するが、そこで初めて、彼は真の世界、自我の網を取り去った必然が支配する世界を受け入れ、その美しさに身を委ねる。恐ろしい暴力と映っていた必然性は、いまや宇宙の音楽となって彼の耳に響き、彼の目に映った新たな世界は、穏やかで明るい、祝福された世界だった。

ヴェイユとマードックの世界観は、その断片だけを取り上げれば悲観的に見えるだろう。しかし、そのような厳しい認識は、実はその背後に絶対的とも言える肯定的な世界への愛があるからこそ、可能となる。そしてこの世界への愛は、自ずと、この世界で共に生きる同胞である人間すべてへの愛にも通じる。実際、この二人の思想家に共通する最も大きな部分は、この、存在するものすべてに対する暖かなまなざしと愛なのである。

研究発表要旨

火と太陽：*The Sea, the Sea* と「洞窟」の比喩

笹　岡　ヒサノ

プラトンが、『国家』で巧みな比喩を用いて著した「様相」から「実在」への魂の遍歴を、マードックは芸術のテーマでもあるとして、主人公の内面的遍歴を描いてきた。*The Sea, the Sea*には、火と太陽をキーワードとする「洞窟」の比喩が枠組みとして深く関わると共に、重層的に取り入れられた他の枠組みと交錯しながら、自己抑制の必要性へと収斂されている点を考察した。

比喩に登場する二人の対照的な囚人。地中深い洞窟で、背後の火を認識できず、火が洞窟の壁に投影する人形の影を全実在と信じる囚人に対し、火を認め、影の正体を知ったもう一人の囚人は、険しい道を登り洞窟の外に出て、火ではなく太陽こそが可視界を支配していることを認識後、仲間を救うため、せっかく脱出した洞窟に再び降りていく。二人の位置の高低関係と明暗の対比は啓蒙度の相違を表わし、後者は無知の闇に棲む前者に光をもたらす役割を担い、作中のチャールズとジェームズに相当する。比喩の火と太陽は、人間界での真実と善のイデアを象徴するが、マードックはこの火を「自己」と解釈した。

成就しなかった昔の初恋の人ハートレーを太陽と崇めるチャールズは、自己の火が照らすハートレーの影を崇拝する囚人、自己を抑圧しながらも、意識下で自己の渇きに悩む人物である。彼の母は、義弟一家の寛容を劣等感や嫉妬心から歪曲したが、現実を無視し、見たいようにしか物事を見ない姿勢は、チャールズにも引き継がれている。イメージや妄想を実在と信じた彼は、現実を歪曲して生きざるを得ず、他者の真実注視や、夫婦という継続的な人間関係を学ぶことなく老いた。心の渇きを手記執筆という内省手段で癒そうと、彼は演劇界を引退し海辺の家に隠棲したが、主知的な態度に反してロマンティックな幻想に駆られ、ハートレー監禁事件を起こした。

事態を解決に導き、生命と魂の危機を救ったのはジェームズであり、チベット仏教に精通した彼は、チャールズ救出後ニルヴァーナの境地を希求し旅立った。チベットでは臨死時、心の本体である閃光を認識し、融合した者には解脱が得られるが、自我や執着に縛られ、心の本体を認識できぬ者は閃光を恐れ、後から現われる偽の穏やかな光と融合することを選んで、永遠の輪廻に縛られるとされている。不可視的閃光と偽の光の関係は、比喩の太陽と火の関係に相当する。比喩の目的も火を太陽と取り違えることなく、太陽を認識する事にあった。関連しあう『チベット死者の書』と「洞窟」の比喩は、人が自己に対して抱き続けるロマンティックで本性的な幻想を抑制し、他者の真実を私心無く注視する事こそ善への道であり、より良い生への可能性とするマードックの解釈に収斂される。

痛みと共に利己的自己に目醒めても、「エネルギーとぬくもりの源泉」である自己が刻々と新たな影を生じる事実を前に、チャールズは人に進歩は無いのかと悲観的な目を向けるが、ジェームズの様な生き方は出来ない。彼は、「人を害さぬ心がけ」をささやかに実践しつつ、「海」に等しい「時」の流動性を生き続けようとしている。

タイトルが想起するヴァレリーの詩“海辺の墓地”は、本作品と内容や展開に多くの共通性を持ちながら差異を強調する枠組みとして用いられ、チャールズの覚醒は、詩の覚醒を更新し、不透明で明確な形の無い、偶然性に支配される人間の現実を鮮明に描きだしている。

A. MacIntyreは、現代は道徳的に新たな「暗黒時代」と述べたが、公共性の喪失や、エゴイスティックな利益追求を最優先した個人や企業の倫理観の喪失など、作中指摘された自己抑制の必要性は、現代人の心の不毛に大きな意味を持つ。芸術と人間の在り方を、読者に深く問い掛ける作品である。

研究発表要旨

『ユニコーン』——その呪われた部分

山本長一

Murdochは、“Against Dryness”において、「現代文学が暴力にとても関心があるのに、悪の説得ある絵を描いていない」といっている。彼女が根源的な流動体である《暴力》の表象としての《悪》に注目していることは明らかで、処女作*Under the Net*以来、*The Fligt from the Enchanter, A Severed Head, The Unicorn, The Italian Girl,The Time of the Angels, A Fairly Honourable Defeat*や、*The Book and the Brotherhood*などの一連の作品に暴力のグラフィックなシーンが見受けられる。

これらの作品のうち、*The Unicorn*はその舞台設定からして、「ゴシック」的色彩が濃く、ヒロインのHannahは西アイルランドとおぼしき荒野の海岸近くのGaze Castleに幽閉されている。この館の不在地主たる夫のPeterの命を受けた腹心の部下たちによってHannahは監視されている。中世風の人里はなれたこの館は、より大きな社会集団の審級としてのアナロジックな構造をもっている。

この小説が展開する以前に、この小集団は《暴力》によって危機に陥っていたという事実があった。Hannahの夫殺し未遂事件というタブーの侵犯がそれであり、前過去での暴力に汚染されたGaze Castleに、第三者としてのMarianがHannahのフランス語家庭教師として下界から闖入することになる。ゴシック・ロマンスの条件としての《恐怖》にとらえられたMarianは、「いわれなき」暴力の血の匂いを早くも感じ取っている。

はたして、PeterによるHannahへの日常的暴力と、それに桔抗する近隣のもうひとつの館RidersのPipとHannahの情事・駆け落ち、それを抑えようとするPeterとの間に暴力があった。その結果Peterは断崖から転落し、障害ある身になっている。このことに対する罰としのHannahの幽閉、また、Peterの手下Geraldと使用人のEvercreech姉弟を中心とするこの共同体成員の全員一致による暴力的監視（gaze）の繰り返し。これはベンヤミンの言う「法維持的暴力」に当たるものであるのか、共同体や共同体間の相互的暴力なのかは興味のあるモチーフである。

しかし、際限なき暴力はソドムとゴモラに共同体を貶め、崩壊に導く恐ろしいものである。ここに今村仁司の理論が説得力をもってくる。つまり、力によって生まれた社会関係はつねに暴力を内在させていて、絶えざる危機が社会関係を脅かし、社会関係に危機が訪れるたびに、社会関係は運命的に暴力によって危機をそらす必要にせまられるというのである。この危機をそらすために「身代わり犠牲」が考えられるから、Hannahをサクリフィスとして選び出さざるを得なくなる。HannahはRidersのMaxによるとスケープゴートであるとされ、一人の罪人、キリストのイメージをもつユニコーンだという。根源的暴力に対し、彼女をスケープゴート、つまり《第三項》として排除することで、この集団の危機をそらさざるを得なくなる。これまでも何度かHannah救出作戦が試みられたが、ことごとく失敗した。7年毎に繰り返される洪水とあいまって、MarianはEffinghamというMaxのかつての愛弟子を誘い、忠実な下僕のDenisの協力で救出を試みるが失敗、Geraldの邪悪な暴力の軍門に下り、彼は主人に代わり絶対的権力を握る。やがて帰還するPeterは洪水で死に、Pipの挫折と死、暴力のミメーシスを断ち切るべくHannahによるGeraldの射殺、さらに彼女は自殺をはかり自分に欲望する三人の男の死を巻き込む《エクセ》とその《蕩尽》は、この暴力への供儀が失敗したことを示している。

研究発表要旨

もう一つの白鳥の歌 —*The Green Knight* を読む①

榎　本　眞理子

Iris Murdoch の *The Green Knight*(以下 GK と略記)は*Jackson's Dilemma*と並ぶMurdoch の晩年の傑作であり、「もう一つの白鳥の歌」と呼ぶにふさわしい。Elizabeth Dipple はGKを「読者をもっとも引きつけて放さない作品の一つ」と称賛している②。

DippleはまたMurdochの自作を語る言葉は大変影響力が強いため、評論家たちはその言葉(「芸術家と聖人の対立」など)を使って彼女の作品を論じ続けていると批判している③し、平井杏子氏もMurdochの小説を小説として読むことの必要を強調している④。

MurdochはGKでTolstoyやAustenなど19世紀小説の世界に限りなく近づいている。その長所はストーリーの面白さ、存在感のある複数のcharacter、そしてsymbolなどがストーリーにうまくとけこんでいること、などである。

*Sir Gawain and the Green Knight*では、Green KnightはGawainに生と死について考えさせる。Green Knightとは他者であり、死であり、また豊かさ取り戻させる、彼方からくる力である。GKでも中心をなすのは、ルーカス・グラフに殺され、後に甦るピーター・ミアの復讐劇である。歴史学者ルーカスは養子だった。そして自分よりも両親に愛された弟クレメントを憎み続けていた。そしてある晩クレメント殺害を企てる。何の疑いも抱かず、勧められるままにワインの杯を重ねるクレメント。やがて時の流れはゆっくりになり、モノはきらきらときらめき、そしてテーブルはやけにだだっぴろく見えてくる。外に連れて行かれたクレメントは、ルーカスが自分の上に凶器を振りかざすのを見て驚愕する。が、倒れたのは見知らぬ男だった。ルーカスに「逃げろ」と言われ、逃げ帰ったクレメントは、フラット中のあかりをつけ、眠れそうもない、つまり真実を照らし出す明かりのもとで起こったことの意味を考えよう、としつつ、結局シーツをひっかぶって寝てしまう。このエピソードでは、光と闇が実に効果的に使われている。光は現実の光であるとともに、真実を照らし出すものでもある。

本書には、ルーカスやクレメントら中年世代のみならず、ハーヴェイ、モイら若者達、また人生の求道者たるベラミが、苦悩しつつ生き生きと生きる様が、鮮明に、共感をもって描かれている。

ところでピーターは結局脱走して来た病院に連れ戻されて死に、ルーカスも、ルイーズの娘アレフとアメリカに渡ってしまう。このため読者はピーター対ルーカス＝他者対自己（「私」）という単純な対立の構図から解き放たれる。そして他者とは私たち一人一人の心の中にも存在するのだと気づかされる。つまりダーミアンがベラミに送った手紙にあるように、神は心の中にこそ見いだすべきものなのだ、と。マードック自身、従来のキリスト教に飽き足らず、様々な宗教に関心を向け、一時は仏教に深く心を引かれたという。しかしその過程で自身がいかに深くキリスト教の影響を受けているかに気づいたという。たとえばマードックは自分をChristian Buddhistと呼んでいる。心の中に神を求めよという言葉は*Metaphysics as a Guide to Morals*にも出てくる。

GKは楽しんで読ませつつも、このような人生の大きな真実の一つに目を開かせる。筆者がGKを「もう一つ白鳥の歌」と呼ぶゆえんである。

注

①研究発表では最初にOrland Gibbonsの*The Silver Swan*を鑑賞した。このマドリガルはGKでも言及されている。*The Bell*では歌詞も出て来る。

②Elizabeth Dipple, "*The Green Knight* and Other Vagaries of the Spirit;or, Tricks and Imagages for the Human Soul;or, The Use of Imaginative Literature," *Iris Murdoch and the Search for Human Goodness*, ed. Maria Antonaccio and William Shweiker (Chicago:The Unversity of Chicago Press, 1996), 143.

③Dipple, 161.

④『アイリス・マードック』彩流社、1995年。

特別講演要旨

MODES OF DESIRE IN IRIS MURDOCH'S POETRY

Paul Hullah

This paper proposes that Murdoch's poetry is informed by a desire to marry, or investigate the possibility of fusion of the real-physical and the spiritual-unknowable in art. By offering close readings of a few poems, I demonstrate how this ultimately doomed desire to unify takes different forms but remains a prime source of creative nourishment to Murdoch's poetry, indeed might usefully be termed her 'muse'.

Murdoch's early poems, influenced by Wordsworth and Hopkins, express naive impulses to relate '[a]ll things to all' by attaining neo-Romantic conjoining of subject-self and object-nature, but offer little constructive instruction as to how this union is effectively to be achieved. The 'real' world does not intrude: these youthful poems are self-contained, abstract in their notion of nature as timeless.

Poems of the 1970s begin to portray assimilation of self into nature in a more satisfying manner, presenting epiphanic monents of mutually reciprocal communion with nature, acknowledging the 'real' world's influence. Inner turmoil and outer incident organically image one another in a manner genuinely Wordsworthian. These poems begin to attempt to map the subsequent, linked desire to investigate how poetry itself(art) may then symbolically translate fusion of inner and outer.

'Music in Ireland', Murdoch's most sophisticated poem, examined in detail here, sets innocent nature against brutal man-made reality and offers synthesis into art as a potential healing force thus source of spiritual renewal in a way more complex than other poems written between 1980 and 1990, but this piece cannot achieve a closed ending. The responese instilled by murder have, on one level, 'nothing to do with' music(art), and yet both are abstract notions formed from material reality, existing in time and space and yet (in a kind of Platonic, essential mode) simultaneously residing as separate from the parts which constitute them.

Thus our desire for resolution, Murdoch's quest for reunification of inner ane outer, must always be 'temporal', never permanent, because *we* are temporal and impermanent with only a 'confused sense' of elements (art, nature) outside our knowable physical world. We cannot escape the fact that we are human, can never be free of the physical world, even in art.

Like many other able poets, Murdoch attempts to solve the subject／object problem by assimilating the mundane world of actuality into the purer realms of nature and art, only to find the desired synthesis precarious and ultimately impossible since the contingent world of flux stubbornly refuses to vanish. Her reverence for art and nature is tempered with painful acknowledgment of the corrupted human world of surfaces from which art must now be made and in terms of which art must be read.

マードック関連著作情報

新刊書

井内雄四郎　『比較の視野　漱石・オースチン・マードック』旺史社、1997 .5 .

平井　杏子　眠れる一角獣　アイリス・マードックと「いばら姫」:『文学空間』第4巻　創樹社、1999.1 .

榎本眞理子　「目覚め」の寓話　アイリス・マードック『鐘』:『イギリス女性作家の半世紀』第1巻　頸草書房、1999.12.

平井　杏子　アイリス・マードック最後の迷い　『ジャクソンのディレンマ』:『文学空間』第6巻　創樹社、2000.1 .

室谷　洋三訳『アイリス・マードック戯曲二編』　音羽書房鶴見書店、2000.3 .

エッセイ

室谷　洋三　Dame Iris Murdochの生涯：『英語青年』145(3) 研究社、1999.6 .

蛭川　久康　自由な人の棲家を築いた作家――マードックの小説論――：『英語青年』145(3)研究社、1999.6 .

井内雄四郎　アイリス・マードックと詩的想像力――『四季の鳥』への道――：『英語青年』145(3)研究社、1999.6 .

岡田　純枝　マードックさんとアルツハイマー病――*Iris*の出版に寄せて――：『英語青年』145(3)研究社、1999.6 .

佐々　木徹　愛すべき人アイリス・マードックを偲ぶ：『英語青年』145(3)研究社、1999.6 .

福永　信哲　室谷先生とアイリス・マードック、ジョン・ベイリー夫妻：『LITTERA』最終号「LITTERA」刊行会(岡山大学環境工学部)、2000.3 .

論　文

田頭　衛子　アイリス・マードックの宗教観を巡って：『PERSICA』第25号 岡山英文学会、1998.3 .

岡本　糸美　Murdochの *The Black Prince*：『PERSICA』第25号 岡山英文学会、1998.3 .

井藤　千穂　アイリス・マードックにおけるユダヤ人――*The Green Knigt*(1993) にみる非神話化とその意義――：『芸文研究』第74号　慶応大学、1998.6 .

McEwan,Neil　"Iris Murdoch and Talk about Plato"：『研究年報』43号 奈良女子大学文学部、1999.

Ono, Junko.　"The Pilgrimage of Bellamy's Soul in *The Green Knigt*"：『PERSICA』第27号 岡山英文学会、2000.3 .

駒沢　礼子　*Henry and Catol*における楕円形の世界：『LITTERA』最終号「LITTERA」刊行会(岡山大学環境工学部)、2000.3 .

小野　順子　Iris Murdochの『鐘』について：『LITTERA』最終号「LITTERA」刊行会(岡山大学環境工学部)、2000.3 .

橋本　信子　アイリス・マードック次世代へのメッセージ：『LITTRA』最終号「LITTERA」刊行会（岡山大学環境理工学部)、2000.3 .

岡本　糸美　アイリス・マードックの*An Accidental Man*――リアリストの描く世界：『PERSICA』第27号 岡山英文学会、2000.3 .

事務局よりのお知らせ

第３回大会について

2001年10月６日(土)川崎医療福祉大学にて開催。研究発表、特別講演、懇親会など計画しています。特別講演など詳細については、後日各会員に連絡致します。

下記の要領で第３回研究発表会の発表者を募集致します。発表テーマに発表要旨（日本語の場合は1200字程度、英語の場合は400words程度）を添えてお申し込みください。

応募資格：日本アイリス・マードック学会会員
発表時間：発表25分、質疑応答５分
締 切 日：2001年６月末日
申し込み：発表者の氏名、所属、住所、電話を明記して、下記あて先まで
〒701－0193
倉敷市松島２８８
川崎医療福祉大学
橋本信子研究室
日本アイリス・マードック学会

原稿募集について

第３号よりマードック作品に関するエッセイ、研究・翻訳のこぼれ話、書評などの掲載を予定しています。ふるってご投稿下さいませ。

本文：1600字程度で、でき得る限りワープロで原稿を作成の上原稿とフロッピーディスク（MS－DOSファイルに変換したもの）を提出
締め切り：2001年10月末日
送先：〒709－0802
岡山県赤磐郡山陽町桜ヶ丘西6－10－6
福永信哲

会計報告

総会で報告し承認された1999年度会計の収支決算をお知らせします。収入は年会費136,000円と寄付等105,600円で合計241,600円でした。支出はニューズレター刊行費23,100円、学会運営費44,055円、通信費15,582円、消耗品費等32,931円で合計115,668円でした。残金125,932円は次年度繰越金としました。会費未納のお方は、速やかにお納めいただきますようお願い致します。

なお、この度の理事会の承認をえて会計係が変わりました。

会計　小 野 順 子

編 集 後 記

マードック学会第２回大会では研究発表に若い世代からも、研究機関に所属していない筋からも応募があり、共感に満ちた質の高い批評が聞けたことを喜んでいます。私はイギリス滞在中、ジョージ・エリオット協会の集いに３度参加して、作家を敬愛する人々が地位や年齢に関係なく作品の味わいを語り合う様子をみて、心和む思いがしました。そこには権威主義に毒されない人情的な触れ合いがありました。私どもの学会も産声をあげたばかりのささやかなものですが、マードック先生への尊敬の絆で結ばれた親しみやすい雰囲気があるように思います。これを今後も大切に育てていければと念じています。

今後は、研究こぼれ話や作品の寸評など幅広く皆様からのご寄稿を歓迎致します。謙遜で質実なマードック先生のお人柄と作風が私どもによき感化となって働きますよう。（S.F.）

The Iris Murdoch Newsletter of Japan
No. 2
発行者　日本アイリス・マードック学会
代　表　室谷洋三
編　集　福永信哲　駒沢礼子
事務局　川崎医療福祉大学　橋本信子研究室
〒701-0193　倉敷市松島288
Tel 086-462-1111　Fax 086-464-1109